# 常に『生きること』に敬意をはらい患者さんに誠実に接し納得のいく人生をサポートする

川越厚・博美夫妻は、20年前より在宅ホスピスケアをはじめ、2000年に末期がん患者や高齢者の「できるだけ家で普通に過ごしたい」という思いを専門家の立場で支援する、在宅ケア支援組織『パリアン』を設立。墨田区を中心に活動している。『パリアン』は在宅ホスピスで成功している日本では数少ないグループの一つであり、在宅医療が重要視されている現在、その先駆的な実践は日本の将来の医療の姿を示す貴重な例である。

『パリアン』の活動は、在宅療養支援診療所・訪問看護ステーション・ボランティアグループ・療養通所介護施設から成り立っている。

クリニック川越（在宅療養支援診療所）は、内科・婦人科患者を対象に外来診療を行い、自宅で過ごす末期がん患者や高齢者を訪問診察・往診の形で医療面から支援している。訪問看護パリアン（訪問看護ステーション）は、ターミナル期にある患者さんが自宅で日常生活を送る上で必要な支援を、訪問看護師によって提供している。デイホスピス（療養通所介護施設）は、医療ニーズと介護ニーズを併せ持つ中重度患者と家族を対象に必要なサービスを提供している。

この活動のユニークな点は多くのボランティアが支え合い、在宅の末期がん患者や高齢者、その家族の暮らしを、『パリアン』のスタッフと共にチームで支えていることである。

2007年の実績は、在宅ホスピス患者131名、在宅で死亡した患者94名、在宅死亡率94％であり、墨田区のがん在宅死率が大幅にアップするのに『パリアン』の活動が大きく寄与している。（開院前の1999年は6・4％、2006年には13・6％）これだけの患者さんが希望どおり自宅で安心して死を迎えられたことは、驚異的な数字である。2007年には、厚生労働省の「安心と希望の医療確保ビジョン」の中でも注目され、2008年には当時の舛添厚生労働大臣もこの施設を視察に訪れた。

設立以来、貧富の差なく質の高い在宅ホスピスサービスを続け、24時間患者さんの呼び出しに答える体制から、患者さんの家族の支援に至るまでをサポートしている。さらに、死後の家族への精神的支援にまで及ぶその活動は、今後の日本の医療を考える上で大きな示唆を与えている。

■クリニック川越にて患者さんと話す川越夫妻

■クリニック川越にて患者さんと川越夫妻

**川越（かわごえ） 厚（こう）** 医療法人社団パリアン 理事長

1973年東京大学医学部卒業。産婦人科を専攻し、茨城県立中央病院産婦人科医長、白十字診療所在宅ホスピス部長などを経て、1994年より社会福祉法人賛育会病院長を務め退職。2000年クリニック川越を開業と同時に、在宅ケア支援グループ・パリアンを設立。在宅ホスピス協会・顧問、聖マリアンナ医科大学・客員教授なども勤める。『家で死にたい』（保健同人社）他著書多数。

**川越（かわごえ） 博美（ひろみ）** 訪問看護パリアン 訪問看護師

1971年聖路加看護大学卒業。茨城県友部町社会福祉協議会ボランティアコーディネータとして活動の後、白十字診療所・ライフケアシステムの看護婦として訪問看護を実践。訪問看護事業制度創設時に白十字本部看護ステーション所長となる。その後、聖路加看護大学地域看護学校教授、看護実践開発研究センター教授を歴任し、現在はパリアンで活動。在宅ホスピス協会会長、全国訪問看護事業協会理事などを歴任。

推薦者 **開原 成允** 国際医療福祉大学　副学長・大学院長


95％縮小